

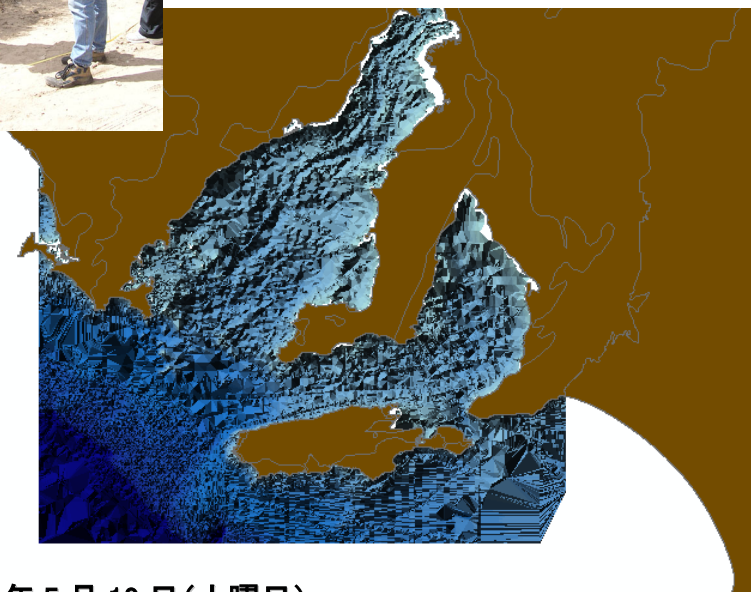
Archaeo-GIS セミナー 第4ラウンド

「^{かい}海・^{がい}外の GIS」

Archaeological GIS analysis in overseas and maritime...



Archaeo – GIS Workshop



日時:2007 年 5 月 19 日(土曜日)

会場:池袋サンシャイシティ・ワールドインポートマート 8 階 801 室
「協力 古代オリエント博物館」

＜Archaeo-GIS セミナー 第4ラウンド開催趣旨＞

本セミナーは古代オリエント博物館に協力を頂いて開催が実現することとなった。そのテーマは海外の考古学における GIS の活用と研究に焦点を当てている。発表内容は国外での考古学での GIS 研究の進展を概観すると共に、海事考古学やペルー共和国での具体的な研究事例を提示する。セミナーは Archaeo-GIS グループの活動理念に沿い、発表者・参加者一体型の形での進行を通じて共に GIS に関する理解を深めることを目的としている。

＜セミナー・スケジュール＞

2007 年 5 月 19 日（土曜日）

10:00 セミナー開始

口頭発表 55 分（発表 40 分、質疑 15 分）

－ 午前の部 －

10:00 発表 1 平敷イネ

「海・外 GIS 教授法一例－ドイツ・ハイデルベルク大学の場合」

11:00 発表 2 木村淳「GIS を用いた海事空間の分析」

12:00 1 時間休憩

（オリエント博物館見学可）

－ 午後の部 －

13:00 発表 3 鶴見英成・伊藤裕子・金子勇太

「ペルー、ラス・ワカス遺跡での考古学 GIS の実践」

13:55 20 分休憩

14:15 Workshop

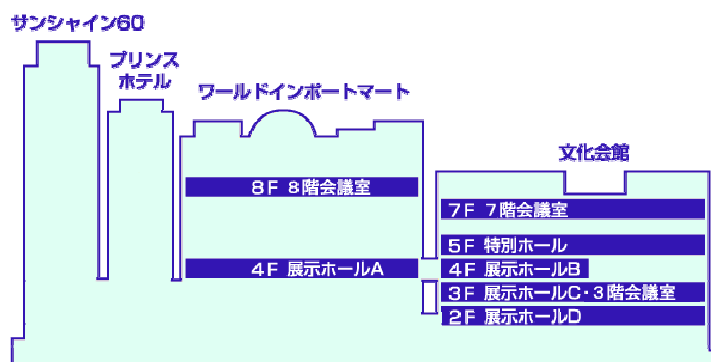
16:00 連絡事項通達ののち閉会

（オリエント博物館見学可 ＊5 時閉館）

17:30 懇親会

＜会場案内図＞

池袋サンシャインシティ内ワールドインポートマート 8F 801 室



＜発表者プロフィール＞

平敷イネ（古代オリエント博物館共同研究員）

ドイツ・ハイデルベルク大学、先・古代史、西アジア考古学研究科卒業（西アジア考古学）。博士論文「Realien auf späthethitischen Reliefs: eine kulturhistorische Studie(後期ヒッタイト・レリーフ状に表現される個別要素の図像解析ー文化・歴史的考察)」。ハイデルベルク大学西アジア考古学科でのティーチング・アシスタントを経て、地理学科リサーチ・アシスタントとして従事した際に、景観分析・遺跡のマネージメントなど GIS の考古学分野における可能性に着目した。「見えるものから導き出す」、「見えないものを見えるようにする」がキーワード。

木村淳（オーストラリア・フリンダース大学大学院）

東海大学文学部考古学在学中に千葉県勝浦市沖ハーマン号、長崎県鷹島海底遺跡、沖縄県西表島カトゥラ貝塚の調査に参加する。水中考古学の実践と方法論を学ぶため、水中・海事考古学の研究が盛んなオーストラリアに渡る。2006 年オーストラリア・フリンダース大学 Master of Maritime Archaeology を修了。2007 年より同大学にて PhD を開始。研究対象は水中遺跡の Site Formation Processes、海事空間分析、水中・海事考古学理論、水中遺跡のマネージメントに関する諸問題。

鶴見英成（日本学術振興会特別研究員）

東京大学文学部考古学専修課程卒業ののち、東京大学大学院総合文化研究科超域文化科学専攻文化人類学コース修士課程を修了、同・博士課程を単位取得退学。研究地域は主としてペルー共和国。大学院在籍中の 1996 年から 02 年までクントゥル・ワシ遺跡、サハラパタク遺跡の発掘調査等に参加。「ヘケテペケ川中流域ラス・ワカス遺跡考古学プロジェクト」を立案、2003、04、05 年に実施し、現在はその資料整理・分析にあたっている。社会変化の過程を多面的に検討する中で、景観に関わる諸課題を認識するに至り、後輩達の助力を得て GIS による仮説検証に着手したところ。

伊藤裕子（埼玉大学大学院文化科学研究科文化人類学専攻修士課程修了）

大学院在学中の 1999 年に、ペルー、クントゥル・ワシ遺跡の発掘調査に参加。遺跡保存をテーマとし、デジタルアーカイブ構想に傾倒。自ら実践を図るため測量事務所や土木コンサルタント会社で CAD&GIS オペレータとして修行中。考古系デジタルアーカイブ技術のプロフェッショナルを目指す。

金子勇太（筑波大学大学院芸術研究科世界遺産専攻修士課程）

埼玉大学教養学部（文化人類学）在籍中の 2004 年にラス・ワカス遺跡発掘に参加。文化財保護の方法を学ぶため筑波大学大学院に入学し、06 年に同じくペルーのインガタンボ遺跡発掘に参加、インガタンボその他周辺遺跡のデジタルマッピングを担当。07 年にはラオス、首都ビエンチャンの道路工事に伴う発掘（日本ODA事業）に参加。現在の研究課題は、途上国の遺跡の保護と遺跡を活用した開発。

＜セミナー発表内容＞

発表 1 - 「海・外 GIS 教授法一例ードイツ・ハイデルベルク大学の場合」

平敷イネ

GIS（地理情報システム）の分析機能の有用性は認識され、すでに考古学においても応用例が見られる。考古学等の専門分野の観点から、空間や景観分析を可能とするツールとして GIS 利用の必要性がある研究、また逆に GIS の操作機能を先に習得し、個々のプロジェクトに合わせカスタマイズしながらの利用例などである。しかし基礎なくして応用はなく、現在のところ、基礎入門の段階では個人が試行錯誤を繰り返し、操作法を習得した場合が少なくない。また専門分野を問わず、GIS の知識も前提としない場合、実際にどのようなカリキュラム・プログラムを組み、簡単なデータベースの構築から景観分析までを、効果的に教授することができるのであろうか。私個人が受講した、ドイツ・ハイデルベルク大学地理学科での GIS 教授法を一例として、教材や資料もあわせて紹介したい。

発表 2 - 「GIS を用いた海事空間の分析」

木村淳

米国や英国での GIS の考古学への応用は 80 年代には始まっていたと言ってもよい。当初 GIS は遺跡・遺構の立地環境や人の行動パターンなどの研究において、複雑な地理情報を統合しながら分析を進めることができるツールとして利用されていた。しかしながら近年の諸外国の GIS 研究の進展を概観すると、インターネット環境の発展と相まって、文化財や遺跡の情報を管理し公開するというマネジメントのツールとしての効果が期待されている。GIS は考古学において空間分析を可能とする機能を有しているが、本発表はこの GIS の分析への利用という側面に改めて焦点をあて、海事考古学研究分野での実践を図った結果を提示するものである。実際の空間分析の手法としては predictive modeling と呼ばれる遺跡の立地パターンを解析するアプローチを採用する。分析対象となるのは、18 世紀後半に南オーストラリア州海域に沈没した 219 隻の帆船と蒸気船である。これらの沈没船が当時の航海システムや航路、港湾施設の位置関係といった歴史的・文化的要素と水深などの地理環境的要素とどのような整合性を見せるのかを分析する。

発表 3 - 「ペルー、ラス・ワカス遺跡での考古学 GIS の実践」

鶴見英成・伊藤裕子・金子勇太

ペルー共和国北部のアマカス平原は、先史アンデス文明の様々な時期の遺跡が多数密集することで知られた地域である。しかし 1980 年代、貯水池の建設によりその大部分が破壊・水没の憂き目に会った。発表者・鶴見は自身の研究テーマに即し、水際にかろうじて残った一帯最大の神殿遺跡ラス・ワカス、および周辺の遺跡計 8 地点を選定、2003～05 年に発掘調査を実施したが、形成期（紀元前 2500～紀元前 50 年）を通じての社会動態を解明するにあたり、景観（眺望、地質学・気象学的要因を含む）を分析する必要性を認識するに至った。そこで貯水池建設に際しての事前調査による遺跡分布図や、農地登録用の地図など、アナログ媒体を含む多様な資料をもとに、GIS によって破壊・水没前の景観を復元・分析する試みに着手したのである。今回の発表は分析の中間報告であるとともに、オペレーションを担当した伊藤・金子からも、実際の作業手順や各自のフィールド経験をふまえつつ、本研究を考古学 GIS 構築の一例として紹介する。